

数多くの出会いや ネットワークを力にして

震災と原発事故による全村避難―。飯舘村には被災直後から、本当に多くの方が思いを寄せてくださり、さまざまな形で支援を行い、一緒に復興へ歩もうとしてみてください。また、避難で離ればなれになった村民同士もきずなを深め、村の再生にそれぞれの立場で関わっています。

長期化した避難の影響から、被災地の人口減少の加速は避けられないと見込まれています。だからこそ、村内で暮らす人、村外で暮らす人、村外から移住する人、国内外から応援を続けてくださる人、それらの間に広がるネットワークが、今後の村づくりの鍵となります。村が復興計画に掲げる「ネットワーク型の村づくり」の形でもあります。人の思いが形づくるとネットワークこそが、課題に立ち向かう大きな力となります。



佐須地区 × ふくしま再生の会

佐須地区には、認定NPO法人「ふくしま再生の会」の拠点があり、地区と会との間で継続的な交流が育まれています。10月7日には、会が田植えをした田んぼで、大学生や協力企業の社員など約70人のボランティアが稲刈りを行いました。2時間あまりの作業で手刈りした稲は、協力農家のコンバインですぐに脱穀。稲わらは田んぼに立てて干しました。稲刈りの後には、会の理事長の田尾陽一さんが地区に新築した自宅前にブルーシートを広げ、地区の人達の協力で準備した芋煮、差し入れの栗おこわなどを、皆で味わいました。

稲刈り参加ボランティアの声

小学4年生の時には家族で被災地を回り、中学3年生の時にはおじいちゃん(田尾理事長)がプロジェクトをやっているこの村に、家族やいとこ家族と訪れました。多少大人になり、被災地の状況が前より理解できるようになりました。富樫凜さん(高校生)



前日に村内の施設や残土置き場を見て、農業を再開している人の話も聞いて。まだまだこれからだね。お手伝いしかできないけれど、ずっと関わりたい。こうした経験は参加している若い社員の仕事にも生かされると思います。河野光郎さん(企業で参加)



ニュースを見ているだけでは(どんな状況かがはっきりと分からず)正直不安もありましたが、来てみて自然が豊かだいい村だと思いました。ぜひもっと村の人が戻って、活気あふれる村になってくれたらと思います。島田怜さん(大学生)



仙台から実家に来ていて、佐須小学校でカフェをやっていると聞いて来てみました。おいしいコーヒーですね。ここは小さい頃からの遊び場でしたから、とても懐かしい気持ちです。

柳沢里美さん



柳沢翔太さん・里美さん夫婦と唯衣ちゃん(1歳)



旧佐須小学校を多くの人が訪れたワンデイカフェ

村に心を寄せてくださる方との交流



左が1日村長の平下さん。秋祭りの記事はP14で

ふるさと住民との交流が始まっています。村では、ふるさと住民票の申請を受けて、住民カードを発行しています。対象は、申請時点で村に住民票のない人で、出身者など元村民も含まれます。ふるさと住民は、特典として、希望者が1日村長を体験したり、村主催のイベントに参加したりすることが出来ます。10月21日の「いいいたて秋祭り」では、初代1日村

ふるさと住民との交流が始まっています

長に、静岡県平下愛さんが就任。平下さんは、今年8月に司法修習生として村役場で実習を行ったことがきっかけで、ふるさと住民票を申し込んでいました。平下さんは、来場した村民と交流し、「人のよき、自然のよき、多くの人に集ってもらえるよう、自分が感じた村のよさをPRしていきたい」と笑顔で話していました。



10月25・26日には、ふるさと住民対象のカメラ教室ツアーも村内で開催されました

響き合うつながる力

村をめぐる人々の

ネットワークに注目!

× 福島大学

福島大学は協定に基づき、村の自分史事業にも協力しています。自分史事業は10月から本格的にスタートしました。写真は松川事務所で行われた「自分史」の聞き取りの様子です



10月6日、福島大学の学生ら約40人が村を訪れ、旧佐須小学校を清掃して地区の皆さんと、そば打ち、裁縫、村検定クイズの作成などを通して交流しました。また、ヒマワリ油やロウソクづくりに活用するヒマワリを収穫。夜はいいいたて球場で野球を楽しみ、「ままでの家」に宿泊しました。

村は、福島大学をはじめ、大阪大学、東京大学、明治大学などと協定を結んで、相互協力・交流をしながら関係人口の増加、村内事業の活性化などを図っています。

翌7日には、学生がアルバイト先のコーヒー店に協力を依頼した「ワンデイカフェ」が、旧佐須小学校で開かれ、地区の人達を中心に、多くの人がおいしいコーヒーを味わって、学生達との交流も楽しみました。